

正義と平和協議会・全国会議
FRATELLI TUTTI ・ 兄弟の皆さん
共に生きる世界を求めて

2020年10月3日に、アジジから教皇フランシスコは、新しい回勅を発表されました。教皇の人類の未来に対する夢を示す文書です。今回の回勅「FRATELLI TUTTI」（兄弟の皆さん）は、社会回勅と呼ばれています。それは、教皇が現代社会の抱えている基本的な課題を取り上げて、福音の光に照らされてそれらを分析し、人類にとって希望に満ちた未来を築き上げるように呼び掛けているからです。教皇は、そのために基礎となるものを示しておられます。

回勅のメインテーマは、「兄弟愛」（FRATERNITY）と「社会的友愛」（SOCIAL FRIENDSHIP）、言い換えれば「すべての人々に及ぶ友情」です。キリスト者を見ならず、すべての人々に関係する課題です。教皇フランシスコは、それを念頭に置いて、キリスト教の価値観に土台を置きながら、広い視野からこの課題について語っておられます。

この時期にこの社会回勅が出される意義

様々な分裂にさらされている現代世界の影を指摘しながら、光への道を示していることは、この回勅の特徴と言えると思います。人類は、希望を与えてくれるメッセージをいつよりも現在において必要としています。

教皇フランシスコの社会に対する考え方のまとめのようなものです。実際に、様々な場で教皇はなされた講話やスピーチ、また、今まで発表された文書の引用は非常に多いです。そのうちに、教皇様の訪日のときにわたしたち自身がいただいたことばも何回か出ています。また、この回勅は特に環境問題を取り扱った「ラウダート・シ」と繋がっていることを忘れてはならないことです。様々な壁を取り除き、隔たりを超えて、ともにいのちを守り、育むことは中心の課題になっているからです。一言でいえば、すべてのいのちの尊厳を訴えています。

この回勅は、教皇フランシスコの教皇としての8年間の歩みから、また、今まで体験された事柄から生まれてきていると感じます。その内容をよりよく理解するために、教皇としての8年間の文書だけではなく、様々な出来事を思い起こす必要があります。例えば、

- ✓ 最初の訪問地としてランペデゥサ島を選ばれたこと。
- ✓ イスラエルが作ったパレスチナとの壁の前の祈り。
- ✓ ギリシャ正教のバルトルマイ主教と共になされたレスボス島の訪問。
- ✓ イスラム教の指導者でいらっしやるアフマド・アル・タイーブ師と共に2019年にアブダビで発表された「世界平和のための人類の友愛」の共同宣言。
- ✓ 日本の司牧訪問の時の長崎と広島での平和アピール。

- ✓ バチカンで、世界の多くの国々の指導者との出会いと対話を通して感じられたこと。
- ✓ 2019年4月に、バチカンでスダンと南スダンの指導者の前ひざまずき、彼らの足に接吻しながら、平和の道を開くことを願った教皇の姿、等々です。

この回勅は、虐げられた人々の観点から世界を見、彼らを中心に置いて新しい世界の在り方を提案しています。人類の未来に対する教皇様フランシスコの夢を伝えている文書です。こういうところから、いくつかのキーワードの意味はより明確になります。

- ✓ 「兄弟愛」(FRATERNITY)と「社会的友愛」(SOCIAL FRIENDSHIP)。これらは、単なる個人的な姿勢に関係することではなく、社会の様々な側面に当てはまります：政治、経済、国際関係。兄弟愛と社会的友愛の概念の広さはこの回勅の一つの特徴です。
- ✓ 「閉ざされた世界」と「開かれた世界」。この表現も色々な現実には当てはめられています。自分自身の生きる姿勢、自分の家族や身近な人々の世界、国家、教会などです。
- ✓ 「出会い」、「対話」と「和解」。兄弟愛と社会的友愛を可能にする大切なものとして語られています。
- ✓ 「人間の尊厳」は、回勅のゆるがない土台になっている。

これらを念頭に置きながら教皇の文書を読んで行く必要があります。ただ、それは抽象的な概念としてではなく、自分の生活に照らし合わせて理解していくことは大事だと思います。兄弟であることは、どこで、何によって感じ、確認できるかと、振り返る必要があります。自分は兄弟だと思い込んでも、兄弟として認められているのでしょうか。兄弟姉妹になる道を歩むことが大切です。

そして、社会的友愛を考えると同じようなことが言えると思います。何年間前に、教皇フランシスコは、修道会の総長たちに厳しい質問をぶつけました。「貧しい人々や排除されている人々は、本当にあなた方を「友」と思っているのでしょうか。兄弟姉妹として生きるように、友となるように、この回勅が呼び掛けていると感じます。

世界に目を

まず、教皇は世界に目を向けられます。多くの人々の努力にもかかわらず、人類の夢とその実現が裏切られた現実に触れます。グローバル化された世界は、本当に兄弟愛を前進させているのでしょうかと教皇は問いかけます。人類に影を落とす色々な課題を指摘しておられます。例えば、切り捨ての文化、人権の実現の不平等、貧富の格差の増加、武器開発の競争、難民移住者の非人間的な状況、コミュニケーションの危機、大事な言葉の本当の意味を失う危険性等です。世界の多くの人々に悩まされている新型コロナウイルスのパンデミックも課題にされています。しかし、それは単なる社会分析ではありません。聞こえてくる多くの人々の叫びを痛くなるほど感じておられる教皇の心が伝わります。大地の叫びもそうです。ですから、わたしたちもこういうことばを生活の

中で受け止める必要があります。わたしに、わたしたちに、何が聞こえてくるのでしょうか。聖書のことばを思い出します、マタイ福音書11章2-9、ルカ福音書1章50-53。

しかし、教皇は、希望を抱かせてくれるいくつかの点も強調されます。旧約聖書の中で伝えられている預言者たちの活動にもみられる現象です。預言者たちは、痛みを感じながら多くの不正を訴えますが、神の心を知っているからこそ、預言者の最後のことばはいつも希望を抱かせることばです。教皇も、希望へ心の扉を開くように呼び掛け、希望を与えてくれる現実を目を向けます。例えば、世代間の対話の中で歴史を振り返ることによって、これからの歴史を築き上げていくための基本を学べます。また、「わたしたち」ということに対する意識を深めることによって、お互いに認め合い、ひとりひとりの価値を再発見することができます。広い展望に立って、ともに生きる喜びを味わうならば、ともにいることのすばらしさを学び、みんなの家である地球をも大事にすることになると期待されています。逆に、「壁を作る人は（国は）、最終的にその壁の中に閉じ込められてしまう」（FT 27参照）とあります。わたしたちにも、このような危険性があります。

時々わたしたちは、現実の厳しさを前にして諦める誘惑を感じます。しかし、一人ひとりの人間の尊さを認め、それに基づいた将来を望む者は諦めるはずがない。具体的にひとびとが覆わせられて不正に満ちた現実に触れるなら、本当に痛みを感じたなら、諦めることはありません。実際に、差別され、除外され、圧迫されている人々は諦めることができない。いのちがかかっているからです。この人々の痛みを自分の痛みとする神を信じる者も諦めることができません。教皇は、わたしたちを希望へ招きます。

心が変わらなければ

「あなたの兄弟はどこにいるのか」。弟を殺したカインに向けられた質問です。その意味が、カインにとって明確であったと思います。

同じ質問はわたしたちに向けられたなら、答えは複雑になるかも知れません。自分の世界の広さによってその問いかけの受け止め方は違って来るでしょう。わたしの兄弟、わたしの姉妹はだれか。何回か話したことがあります。深く心に残っている出来事があります。修道会の本部の仕事をしていた時に、アフリカに何回も行きました。素晴らしい自然を見て何度も感動しました。しかし、砂漠化が進んでいて、それによって困っている人々が増えてきています。皆さんがご存知の通り、気候の変動によって豪雨や洪水が多くなり、その中で多くの人々が命を失い、大きな被害が生じます。日本でも最近これを体験しています。しかし、先申し上げたように他のところでは、逆に、雨が降らなくなり、砂漠化が進んで行っています。考えてみてください。雨にしか頼ることのできない農業は、雨が降らなければ何もできません。それは飢餓につながっていきます。自分の子どもが、今日も明日も「おなかですいた」と泣きながら訴え続ければ、どのぐらい我慢できますか。自分の数少ない物を持って、どこかへ行くしかないでしょう。「環境難民」になります。ただ、このような被害を負わされている人々は、ほとんど気候変動の原因になっていません。先進国と言われている国々の経済政策、また、わたしたち自身のライフスタイル等に

その原因があります。遠い国で起っている問題は、わたしたちの身近な課題であることに気づきます。無関心ではいられないはず。 「あなたの兄弟はどこにいるのか」という問いかけの重さを感じるはず。

教皇は、ルカ福音書の10章に伝えられているたとえ話をコメントなさい。わたしたちは、何回も黙想したところで、様々な活動を方向付ける教えなのです。あのサマリア人は、倒れていた人を見て、通り過ぎることができませんでした。関わって、助けてあげたのです。言うまでもなく、それによって当時の社会の差別が亡くなったわけではないでしょう。ただ、彼の取った行動によって、社会のどの問題をもなくするための基本を示したのです。イエスのなさり方です。マタイの福音書にはっきりと示されています。「

」 (マタイ9・35-38)。

イエスのなさり方はこれです「見る(聴く)・憐れむ(共感する)・行動する(関わる)」。倒れていた人を助けたサマリア人の行動でもあります。イエスについて行きたい人の生き方です。

大事なのは、「自分の隣人は誰か」明確にすることだけではなく、今倒れている人の「隣人になる」ことです。このような姿勢で生きると、兄弟愛と社会的友愛が実現されている世界は、可能になります。

「私たちは多くの面で成長を遂げたものの、発展した社会において、もっとも弱く弱い人々に寄り添い、世話をし、支えることには無知なのです」(FT64)と教皇フランシスコは述べておられます。心の変化、回心、が求められます。

開かれた心から開かれた社会

「ともに生きる」とは何かという問いは基本的な課題です。まず、わたしたち一人ひとりにこういうことばは、どのように響くのでしょうか。出発点は、一人ひとりの人間の尊厳を認め、自分の価値観の土台とすることです。それは、生まれたところ、社会的な地位、経済的な状況等と関係なし、一人ひとりの人間としての尊厳です。ただ、「兄弟の皆さん」の中で示されている「人間らしさ」というものをしっかりと心に留める必要があります。人間は、関わりの中で生まれ、成長し、生きるのです。従って、「人間らしさ」は、この関わりの中で自分が行かされ、他の人々を生かすことによって示されます。「兄弟の皆さん」の人間観はこれです。こういうところから、皆が望んでいる正義と平和に溢れる社会が生まれます。

実際に、人類の歴史の中で、自由、平等、正義を求める運動が繰り返されてきた。人間のうちに根強く存在している要望です。誰もが知ってる「自由、平等、兄弟性」を求めたフランス革命や人権を土台に置こうとして作られたアメリカ合衆国の憲法は、二つの例です。しかし、フランスで植民地の支配が終わらなかつたし、アメリカでは、

先住民や黒人の人権を認めるには大分時間がかかったのです。現在でも、痛ましい事件が繰り返されています。旧約聖書の時代から、預言者たちが呼び掛けたことです。こういう歩みを振り返ってみますと、改めてとても基本的なことが確認できます。心が変わらなければ、不正と暴力の悪循環が止まらないのです。教皇が求めている兄弟愛と社会的友愛は、この悪循環に歯止めをかけることのできる唯一の方法です。何より、人間の尊厳、命の尊厳を中心に置かなければ、それが不可能です。すべての人々に心を開き、一人ひとりの人権を守り、すべての人々の幸せを切に願うことがなければ、多くの人々や自然が踏みつけられてしまいます。

今年の1月27日の朝日新聞の朝刊に中学生の手紙が載っていました。写真家の渋谷さんの写真展を見ながら、「心の境界線をなくしたい」ということを感じたと書いていました。教皇は同じことを求めておられます。すべての人々のために、三つの「T」の権利を力強く訴えています。TIERRA, TECHO, TRABAJO（耕す土地、住む家、働く権利）。

一人ひとりの人間としての尊厳を認められて生きる権利が保障される義務が誰にでもあります。教皇が引用されている聖グレゴリオのことばは心に響きます。「貧しい人々に何か必要な物を与えるとき、わたしたちは自分のものを寛大に与えているわけではありません。彼ら自身のものを彼らに返しているだけです」（FT119）。

皆が大きな家族として地球という家に住み、皆が大きい人類の家族として同じ食卓を囲む。「兄弟の皆さん」が求めている社会はこういうものです。イエスの生涯のエピソードを思い出します。断食の掟を守っていないと批判されたイエスは、律法学者たちに応える。今は断食のときではなく、今は、皆が共に食卓に着くときだ。しかし、これこそ彼らが拒んでいたのです。その食卓に皆のために、罪人と見なされていた人々のためにも、貧しい人々のためにも、場を設けなければならないからです。（マルコ福音書2・18-21）。人類の家族の食卓から一人でも排除されたら、兄弟愛と社会的友愛の実現が不可能です。わたしたち一人ひとりが、本当にそれを信じているのでしょうか。毎日の生活の中で確認する必要があります。本気で信じていれば、その実現のために働くのは当然だろうと思います。

こういう背景の中で、教皇は難民移住者の悲劇に触れます。彼らに対して求めておられるのは、何回も繰り返された四つの動詞の実行です。「受け入れる」、「保護する」、「向上させる」、「共生する」です。他者を受け入れる理由は、ただ一つです。同じ人間であるということです。教皇は、この人々の人権を守る法律の整備を求めています。その根底に一人ひとりの価値観が問われます。

移住は、人類の歩みの一つの特徴だと言えます。出会いによってさまざまな文化が生まれて来た。多様性は、怖がるものではなく、新たな豊かさをもたらすものです。具体的に難民移住者と関わっている人々はこれを確認できたはず。もちろん、問題もありますが、開かれた心で関わっていけば、解決の道が開くはず。

日本にいるわたしたちも、この点について考えるべきです。幸いに多くの人々とグループが動いています。「兄弟の皆さん」の141のことばを忘れないようにしたい。「世界の国々の真の良し悪しは、国としてではなく、人間家

族として考えることのできるこうした力で量られるものであり、それは特に、危機の時代に試されます」。

壁が作り続けられています。有名な壁があります（バングラデッシュの難民を止めるためにインドが作った3,000キロメートルのフェンス、パレスチナ人の侵入を防ぐためにイスラエルが作った壁、朝鮮半島を二つに分ける壁などです）。現在でも壁がどんどん建設されています。第二次世界戦争後作られた51壁のうち、その半分は2000年と2014年の間に作られています。Uri・Fridmanは、「壁だらけの世界」という本の中でそれを訴えています。先に引用したところを繰り返します。「壁を作る人は（国は）、最終的にその壁の中に閉じ込められてしまう」（FT 27参照）。開かれた心が必要です。そこから、開かれた世界が生まれてきます。FT 35 最後のところ

政治の役割りは不可欠

教皇は政治に触れ、最良の政治を求めます。ある人々は、教会の指導者たちは政治的な課題に触れることを批判します。特に教会の指導者たちが示す方向性は、自分自身がサポートしている政策に疑問を投げかけるときにこうなります。ただ、教会の指導者たちは一定の政治思想や政党を支援するのではなく、人間の尊厳、いのちの尊厳が守られるように政治の在り方を問います。パウロ六世のことばですが、「教会はこの苦しみの叫びの前に震えながら、皆さん一人一人が兄弟の訴えに愛をもって応えるように求めています」^{（諸民族の進歩推進について3）}。その応えに政治的な側面もあります。政治に対する発言の源泉はそこにあります。

兄弟姉妹の絆に結ばれてともに歩む人類の実現のために、政治は大事な役割を担っています。とくに、弱者切り捨てが多い現代社会の中で、皆の共通善を中心に置いた政治の役割はとても重要です。ただ、この目的を実現できるために、最良な政治が必要です。教皇は、政治のいくつかの危険を指摘しています。例えば、権力を存続させるための手段になってしまうこと。また、市場経済によって左右されること。あるいは、選挙で票を目指して、即効主義に陥って、一時的な効果を上げてても社会が必要とするものに応えないこと。皆の共通善、特にその共通善が届かない人々を中心に置かないことなどです。

皆の共通善、特に排除されている人々の叫びに応える政治を築いていくために、教皇はいくつかの提案をなさっておられる。

- ✓ 政治への皆の参加。特に、社会のはずみに追いやられている人々の政治への参加がないとこの人々が抱えている数多くの課題に目を向けられない。
- ✓ 世界の経済を取り仕切っている多国籍企業を監督する国際機関の設置。
- ✓ 国連の改革。
- ✓ 結ばれている協定を守ること。

- ✓ 市民社会の数多くの団体の活動を支援すること等です

実際に、国連で活動しているカトリック団体、特に修道会が多いです。日本の教会としても、その繋がりを作ることができれば、活動は支えられると思います。教会ほど全世界にネットワークを持っている団体がないとも言えると思います。これだけでなく、誰もが目を向けないところに教会、特に修道者の共同体や信徒のボランティアは、人々とともに歩み、踏みつけられている人権を守ってもらうように働きます。構造的に排除されているこの人々の叫びをそばで聞き、彼らの痛みを感じ、その戦いを支えていることは、兄弟愛や社会友愛の一つの具体的な表現です。何億人ものいのちに係わる決断がされる国連に福音から生じてくる人間観、世界観を告げる必要があります。大事な福音宣教です。

この働きは、教皇が呼び掛けていることに応えます。「社会、政治経済への参画について考える上で必要なのは、草の根の市民運動を取り入れ、排除された人々を運命共同体の枠組みに参入させるところからたぎる倫理的な熱のほとばしりをもって、地方、国、そして国際的な総括体制を突き動かすことです。そしてまた、下から、草の根から広がって結集する、こうした運動、こうした連帯経験が、より連携してまとまっていくよう促すのも大切です」(FT169)。

その中で、SDG (SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS・持続可能な開発目標)は、教会の活動の中に取り入れることは、「時のしるし」を受け入れることだと思います。その中でわたしたちは、聖霊の働きを見出し、聖霊の光に導かれて歩むなら、天地の創造主であり、いのちを愛する方である(知恵の書11・24-26参照)神への信仰を宣言し、証しします。

教皇は、兄弟愛と社会的友愛を魂とする社会と政治を求めます(FT180参照)。また、政治に優しさが必要であると述べられます。非現実的と言われるかも知れませんが、人権が踏みつけられ、明日はどう生きるかがわからない人々を目の前にして、また、こういう人々と真剣に関わるなら、こういう道しかないと確信するようになります。教皇の政治に対することばはここから生まれています。

出会い、対話、和解なしには、兄弟愛と社会的友愛に溢れる社会が不可能

「利己的な無関心と暴力的な抗議の間には、可能な選択肢があります。対話です」と教皇は述べておられます(FT199)。ただ、それは、簡単なものではありません。「兄弟の皆さん」を読みながら色々と考えさせられたのです。確かに対話には様々な条件があります。

- ✓ まず、相手の存在を認めることです。人間としての尊厳、その文化の価値、相手の存在の必要を認めることです。「役に立たない人、いなくてもよいという人が誰もいない」(FT215)。

- ✓ また、自分自身の人生を支え、方向付けてきた価値観を謙虚に示すことは大切です。特に相対主義にさらされている現代社会の中で、それが重要です。確信を持たない人は、対話もできないのです。
- ✓ 対話は透明性を必要とします。隠れた目的があるとすれば対話でなくなります。

対話を通して、確かに新たな展望が開きます。しかし、同時に厳しい問いかけを受けます。自分の偏見や矛盾に気づかされ、自分の世界観が揺さぶられます。ただ、兄弟姉妹として生きるために対話は不可欠なことです。本当の対話を求めるなら人の前にひざまずく姿勢で取り組まなければならないでしょう。しかし、それは何でも受け入れるということではありません。それは、相手のうちにあるよいものを引き出す唯一の道です。対話を通して真理をともに探し、その心理を明確にするように努めます。

ここに教皇が強調されているもう一つの大事な点があります。対話を支えるのは、基本的な真理です。人間が与えられている命の尊厳が認められ、誰もがこのいのちを豊かに生きる世界を築く義務を受け入れることです。相対主義は解決ではないと教皇は述べておられます。普遍的な価値観を認める必要があります（FT211参照）。人間は、そのときそのときの都合を乗り越えて、変わることがない真理を見出すことができます。それが重要です。そうでないと、都合に合わせて人権を踏みつけてしまうルールを作る危険性があります（FT208-209参照）。真理は多数決で決めるものではありません。対話を通して、この真理をより明確にし、真理に基づいた世界を築く道を探ります。ただ、教皇フランシスコが述べられているように、それは簡単なものではありません。骨の折れる仕事です。一人ひとりが「平和の職人」になるように呼びかけておられます。

そして、和解です。対話に臨む人々は様々な傷を負っています。これは、個人に対して、民衆に対して、国に対しても言えることです。その理由は様々でしょうが、対立はその一つです。「熾烈な対立を経た者は、嘘偽りのない真実を出発点にして語るのです。過去の責任を引き受けることで、未来を、過去の無念、間違い、影響から解放するために、悔い改めの姿勢で回想することを身に着ける必要があります。事実の歴史的眞実に基づいてのみ、相互理解と、万民のための新たな総合への挑戦に向けて、粘り強く継続的に努めていけるのです」（FT226）。

「出会いの文化」はこの和解を目指します。だからこそ、あらゆる活動（経済、社会、政治）の中心に人間の崇高な尊厳と共通善を置くべきです。確かに、和解の道に「愛する」「ゆるす」ことが不可欠です。しかし、この二つのことばの正しい理解が必要です。

しかし、ここに疑問も生じます。すべての人々を、例外なく、愛すべきでしょうか。抑圧者は、どうでしょうか。教皇は、こういうような複雑な問題を取り上げています。ゆるすことは悪を認めることではありません。逆に、正義を求めるのは当然であり、自分あるいは誰かに害を加えた人に対する義務でもあります。だが、復讐から手を引くのは、本当の強さを示し、和解に導く道です（FT241-243参照）。抑圧者を愛するとは、抑圧を辞めさせる様々な方法を探ることであり、それに努めることです。

また、ゆるすことは忘れられることではありません。苦しみの記憶は、新たな平和を作り上げる原動力に変えていく努力はとても大切です。

最後に教皇は、日本にいるわたしたちをも問いかける二つの課題に触れます。戦争の不正義と死刑なのです。両方とも人間の尊厳を否定し、あってはならないことです。日本訪問の時に核兵器について教皇フランシスコが述べられたことばを思い出します。その造成とその保有は、非人間的なことであり、倫理に反するものです。人々のいのちの尊厳を無視する力の原理の現れです。戦争もそうです。私たちの記憶に様々なイメージが重なっているだろうと思います（焼き場の前に亡くなった弟を担いで少年の写真、シリアのアレポで爆撃の後に苦しんでいる子供の姿、名古屋の入国管理局の収容所で亡くなられたウィシュマさんの事件等です）。これらを思い起こしますと、平和のために祈り、働くしかないという決意は深まります。

兄弟愛と社会的友愛に貢献すべき宗教者

宗教は、目に見えないものに対してのまなざしを育て、人間の本当の尊厳の源に目を向けさせます。「様々な宗教は、どの人も神の子ともなるよう招かれた被造物であって尊いという考えをもって、社会における兄弟愛の構築と正義の擁護のために貴重な貢献をしているのです」（FT271）。そのために宗教同士の協力はとても大切です。宗教の対話を通して、視野が広がり、自分自身の信仰体験が清められ、深まります。その中で、わたしたちキリスト者にとって、神にかたどって創造された人間の尊厳ははっきりと見えてくるはずで、人間の尊厳が守られるための働きは、信仰告白になります。

回勅の281に、本当に光になることばがあります。「宗教同士が協力しての、平和の歩みは可能です。その出発点は、神のまなざしでなければなりません。なぜなら、神は目でご覧になるのではなく、心でご覧になるのです。それに神の愛は、宗教にかかわらず、すべての人にとって同じです。無神論者に対しても、その愛は変わりません。最終の日が来て、物事はあるがまに見える光が地上に満ちたなら、わたしたちはどれほど脅かされることでしょうか」（FT281）。

教皇フランシスコは、2019年2月4日にアブダビで、イスラム教の指導者アフマド・アル・タイーブ師とともに出された共同宣言のことばを思い出させます。「宗教は戦争をおおることも、憎しみ、敵意、過激主義を募らせることも、暴力や流血を招くこともないと、断固として宣言します。こうした惨事を招いたのは、宗教の教えからの免脱、宗教の政治利用であり、歴史の一時的に一部の宗教グループ — 宗教的感情が人々の心に与える影響を悪用……した者たち — による解釈の結果なのです。真実、神は、全能者は、ご自分を誰にも擁護してもらう必要はなく、人々を恐れおののかせるためにご自分の名が使われることを望んではおられません」（285）。それに基づいて二人は、正義、平和、兄弟愛を呼びかけたのです。

最後に教皇は、わたしたちの平和のための働きの火を燃え立たせてくれる何人かの人を思い起こします。アシジの聖フランシスコ、マーティン・ルーサ・キング、デズモンド・ツツ、マハトマ・ガンディーとシャルル・ド・フォーコー。そして、名前は知られていないが、平和と正義の実現のために尽くされた多くの人々は、わたしたちの歩みを支えています。

最後に

最終的に、兄弟愛と社会的友愛はどのように生きてかは、わたしたちの人生の評価基準になります。**マタイ 25・31-46**には、イエスはこれを分かりやすく説いていわれます。

ブラジルのサオ・フェリックスの名誉司教でいらしたペトロ・カサルダリガはこう書いています。

「人生の道を歩み終わるときに聞かれます。

どう生きてきたか。どのように愛したか。

わたしは、そのとき何も言わず、

ただ、多くの人々の名前が刻まれている心を開きます。」

人を、特に虐げられた人々を、心にかけて生きるときに、神が望んでおられる世界が実現されます。神の国の訪れです。これこそ、人類の望みではないでしょうか。

2022年3月4日

ヨゼフ アベイヤ

福岡教区司教